

めでいかる

てんかんを 生ききる ⑧

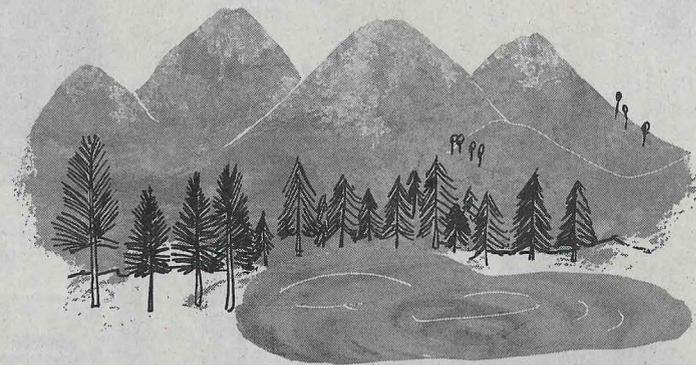
— 今野 こずえ

てんかんとよく似ているが、実際にはてんかんではない「心因性非てんかん発作」という症状がある。「偽発作」「ヒス」と呼ばれるため、その言葉に傷ついたり、ストレスに悩まされたり、周囲に誤解される恐れもある。眠っているとき、全身に力もちろん、わざと起こす発作ではない。

私も「心因性」と診断されたことがある。神奈川県内の病院で医療ソーシャルワーカーとして働いていた、26歳の時だ。当時、抗てんかん薬を飲んでいて、ほとんど症状

「心因性」診断に驚き

りつけの東京の病院に入るとい焦りが、さらなる院すること。ベッドのストレスへとつながった上でも仕事に気がかよった。入院中も発作は毎晩の初めに起こる「心因性」と診断された。ショックだった。発作の原因であるストレスを自覚していなかっただけに、診断に納得できず受け入れることができなかった。



イラスト・すぎやましょうこ

心因性非てんかん発作は、てんかんと似た発作だが、心身には何ら影響がない。ストレスを受け、生活環境やセリグ、精神安定剤の有効。抗てんかん薬は効果がない。心身には何ら影響がない。ストレスを受け、生活環境やセリグ、精神安定剤の有効。抗てんかん薬は効果がない。

メモ

漢方医の技 ITで普及へ

開発進む診断支援システム

専門医以外には難しいとされる漢方独特の診断法を、ITを活用して広く普及させられないか。漢方の診断支援システムの開発が、厚生労働省などの研究費で2008年から進んでいる。目標は、国際的にも分かりやすい診断の標準化。まだ道半ばだが、完成すれば漢方もっと身近になりそうだ。

一般医9割が処方

現在、健康保険で使える漢方薬は約150種。業界団体の調査によると、日常診療で漢方薬を使用している医師(眼科、美容外科など)一部の診療科を除くは約9割に上る。漢方は、患者の症状だけでなく、健康状態にも着目し、「証」を重視する。漢方薬は、患者の症状だけでなく、健康状態にも着目し、「証」を重視する。漢方薬は、患者の症状だけでなく、健康状態にも着目し、「証」を重視する。

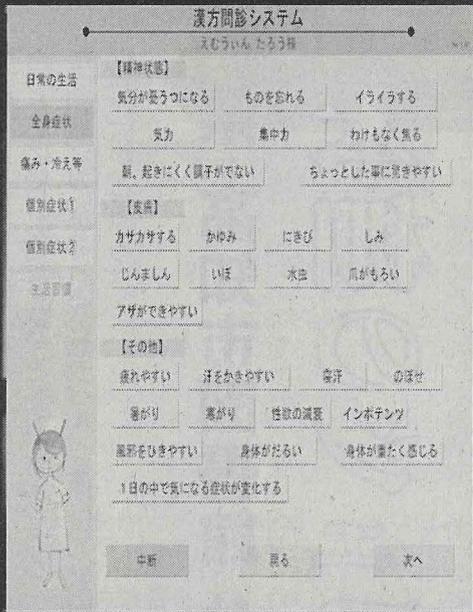
データ蓄積し標準化

「患者一人一人に最適な『個別化医療』を目指す点、検査結果よりも患者の訴えを重視する点で、漢方はより患者目線に立った医療と言えるのではないか」と渡辺さん。だが、証の見立ては医師の専門知識や経験に基づいており、分かりやすい客観的基準がない。「これではせっかく漢方薬を使っても、良さを十分に引き出せない」と、一般医師向けの診断支援システムの開発に取り組むことになったという。

患者が入力

その第1段階として、患者が自分の自覚症状や体質を、タブレット端末などのタッチパネル式画面で入力する「問診システム」を製作した。

患者は画面に表示される「イライラする」「暑がり」など数百項目の質問や選択肢への答えを入力。漢方専門医師による診断結果と照合することで、適切な診断につながる。データの集積は10年にます富山大、千葉大など計7施設に広げ、最終的に患者約6200人分、約3万5千件のデータをを集め、148の問診項目を



患者が自覚症状などを入力するタブレット端末の画面(渡辺賢治氏提供、液晶画面は、はめ込み合成)

富山大、千葉大など計7施設に広げ、最終的に患者約6200人分、約3万5千件のデータをを集め、148の問診項目を

感想をお寄せください